
運命という名の奇跡

榎 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命という名の奇跡

【Zマーク】

Z8932C

【作者名】

檻 麻容

【あらすじ】

『ミシシング・リンク』と『紅に沈んだ言葉』が繋がった話。『紅に』の夏目が心に疵を負い、『ミシシング』の関係者がそれを治す。それは『世界の関係者』と『由宇』の出会いだった。その出会いは、『世界の関係者』を変えていく - -

1・それは始まりで

「2年3組の真弓夏目くん、至急職員室まで来てください。繰り返します…」

騒がしい教室に、凜とした放送部部員の声が響いた。夏目は校内放送での呼び出しに、首を傾げながらも教室を出て行つた。昼休みだつたため、生徒のほとんどは注意を向けていない。形式的に放送がかかっている間は潜められていた話し声も、元に戻つていた。

一緒に諏訪小百合作の弁当を食べていた途中で呼び出されたため、残された須賀由宇、周防智哉、小百合は何事かと驚いていた。

「嫌な予感がする」

「妙に当たるよね、由宇の勘」

由宇の咳きに、小百合は沈んだ声で応えた。智哉は小百合に同意するように頷いた。由宇の勘は当たる。それも、悪い事は高確率で当たつっていた。

今回も例外ではなかつた。暫くして教室に戻つてきた夏目は、変わらないように見えた。それは、由宇達を除いてのクラスメイトにとつては、にすぎない。

由宇は夏目の前に立つた。

「真弓、何があつたんだ？」

「…須賀くん。…両親が、飛行機事故で…死にました」

感情が籠つていらない夏目の声に、由宇は背筋が震えた。淡々と言つてはいるが、それはこの状況では異常だつた。両親が死んだ。それなのに、夏目はいつものように振舞えている。何事もなかつたかのように、帰る用意を始めていた。

由宇は夏目の手を掴んだ。

「夏目！ 理解しているんだろう？！」

夏目、と名前で呼んだからか、夏目の体はビクッと反応した。今、

『真弓』なんて距離のある呼び方じゃ 夏目には届かない。由宇は本

能で感じ取っていた。

夏田はまだ感情の籠らない声で答えた。

「わかっているんです。あんな人たちでも、親ですから。でも、実感が湧かないんです」

「夏田、僕が必要？」

由宇の言葉に、夏田は顔を由宇へと向けた。教室に戻ってきて初めて目が合つ。

由宇は手を握り締めたまま、夏田の返事を待つた。初めは冷たかった夏田の手が、だんだんと温かくなつてくる。感情が追いついてきていた。

「…一緒に来てください。由宇が、良い」

夏田の返答に、由宇は頷いてから手を放した。それからすぐに帰る用意を始めた。

夏田は一息吐いたところで、前に座る智哉と小百合に気付いた。二人はじつと夏田を見ている。

「すみません」

「何に謝つてるの？ 由宇を独占することに對して？ なら、謝る必要はない。君は友達なんだから」

「そうよ。由宇を選んで正解よ。これから、必要となるわ」

智哉と小百合の気遣いに、夏田は弱い笑みを浮かべた。まだ、頑張れる。薄い糸が切れそうになりながらも、夏田は立つていた。そして、それを繋いでいるのは由宇だつた。親と同じ位置にいたのかもしれない。夏田はさつままで繋いでいた手を強く握り締めた。由宇が必要だと、考えなくとも選んでいた。

「今日来る患者は、泉里が担当してね」

「それは、『世界の関係者』ということですか？」

さらりと言つた葵に、泉里はそれしか思いつかなかつた。しかし、葵は首を横に振る。

『現世の神』である葵の言葉は予言であり、絶対的な命令だつた。『世界の関係者』の一人、『心の司の長』である泉里に逆らうつむきはなかつた。

以前、『世界の関係者』が患者として訪れていたが、葵は何も言わなかつた。それなのに、今回は『世界の関係者』ではないのに助言する。この差は何なのか、泉里は説明を待つた。

「患者の付き添いが、影響力のある人なんだよ。きっと君も好きになる。患者はその人が時間をかけて治すんだ」

「僕は治療をしないんですね。処方だけで、その影響力がある人とはどういう人なんですか？」

「必要としているものを与えてくれる人、かな。自分では気付かない、必要としているものをね。それが嫌われる要因にもなつたりするんだけど。彼は、この時代の『奇跡』だよ」

奇跡だから、泉里も好きになる。そう説明した葵は、指を鳴らして消えた。パチンと、音だけが残る。

突然現れて、消える。『能力』が使える者の移動方法だつた。葵が朝早くに来るほど、今回は特別な出逢いだということが知れた。

「じゃあ、部員には会わせられないかな」

自分でそんなに影響を受けるなら、未熟な司たちが受ける力は大きいだろう。葵が去つた場所を見ながら、泉里は奇跡との出逢いを楽しみにしていた。

3・俱楽部への誘い

予想以上だつた。夏目は両親の死に、半壊の状態まで陥つた。何とか、由宇が代わりとなつている部分がある。今まで虜げられてきただけの親子関係だつたが、夏目にとっては親に違いない。それが、いなくなつて初めて実感できたのだった。その場にいた夏目の母方の祖父母は、夏目を構う余裕はなかつた。

遺体の確認が終わつた後、その後のことは祖父母に任せ、由宇と夏目は家へと向かつた。その途中の公園で、夏目は力尽きたように倒れ込んだ。由宇はなんとか片腕を掴み、地面への衝撃を和らげた。

「夏目」

「…泣けないんです。痛いのに、辛いのに、まだ、あの人たちの戒めが解けない…！」由宇、泣いてくれますか？」

夏目は地面に膝を着き、顔を俯けたまま由宇の手を取つた。繋いだ手から夏目の震えが伝わる。夏目は両親によつて泣くことを許されてなかつた。その戒めは、いなくなつても続いていた。

由宇は夏目と目を合わせるため、膝を着いた。

「君が生まれたことに感謝したい。頼まれなくとも、泣いてるよ」夏目の手に、由宇の涙が落ちた。温かくないはずの涙に熱を感じる。夏目は由宇という細い糸だけで自我を繋ぎとめていた。

「心を護りたいなら、サイコロジー俱楽部に行けばいい」

突然、背後から聞こえた声に、夏目は振り向いた。由宇は自然とその人物を捉える。

色素の薄い髪が太陽に照らされ、輪ができるように見えた。容姿は整い、それは智哉と小百合以上で、この状況で現れた彼は一人にとつて天使だつた。

「サイコロジー俱楽部…？」

「心療内科だ。まあ、普通じゃないけどな。普通じゃないからこそ、救われる。喻えるなら、友達感覚かな」

苦笑した彼は、夏田ではなく由宇を見た。由宇は流れる涙をそのままに、光を持つ瞳で応えた。信用してもいいのか見極めるために由田を逸らさない。由宇にとつて、容姿は判断材料から除外される。薄い笑みを浮かべた彼は、ゆっくりと二人に近付いた。そして名刺のような紙きれを由宇に渡し、透き通る声で続けた。

「俱楽部に行つたら、十夜の紹介だと言えばいい。結局は、君が必要なんだ。由宇、君がね」

「僕の名前を何故…」

「俺がここにいるのと同じ意味さ。それが前提だから。なんにしろ、選ぶのは君たちだ」

最後に柔らかい笑みを作り、十夜は去つていった。後ろ姿にかける言葉はなく、由宇は涙を拭つて夏田を見た。夏田は考へているようだった。少しでも、両親の死という思考から外れるのは夏田にとって良いはずだ。

由宇は繋いだ手に力を込めた。

「夏田、どうする？ 俱楽部に行きたい？」

「…行きたい、です。少しでもヒントが貰えるなら」

はつきりと言つた夏田に、由宇は先に立ち上がりつて夏田の手を引いた。しっかりと立つた夏田の前に、先程十夜から渡された紙をかざす。そこには、サイクロロジー俱楽部の案内図が記されていた。意外と近くに位置する。由宇にとつては家より遠ざかるが、夏田にとっては通学路の途中にある。

由宇はそつと手を放した。

「僕だけは疑わないで。なにがあつても、夏田の味方だから」

「そんなの、前からわかつていますよ。だから、由宇しか選べなかつた」

由宇にとつては弟に近く、夏田にとつては親の代わりになつていた互いの存在。弱いながらも応える夏田に、由宇は安心して歩き出した。

案内地図の通りに進んだ先には、平凡な一軒家があつた。集合住宅の中に紛れる、そんなどこにでもある外観の家。表札には『紗雲』とある。

由宇は迷わずインター ホンを押した。

『はい』

機械音の後に、間を空けずに声が続いた。予め知っていたかのような速さで、十夜に似た透明がかつた少し高い声だった。

「十夜さんの紹介で伺つたのですが」

『ああ、聞いてるよ。よつこや、サイコロジー倶楽部へ』
通話は切れて、しばらくしてから玄関のドアが開いた。現れたのは、白衣を着た同い年くらいの少年だった。不思議と十夜と同じ雰囲気を感じさせる。予想通り、容姿は整っていた。

由宇は、表面を取り繕つのに精一杯の夏田に気をつけながら対峙した。

「初めまして、須賀由宇です」

「ハジメマシテ、紗雲泉です。治療が必要なのは隣にいる真四くんだね？」

疑問形のように語尾を上げているが、確信している強さの声だった。由宇は少し驚いたが、十夜も同じことをやつてのけた。今更拘るのはやめた。一度信じると決めたなら、迷わないのが由宇の拘りだった。

「ええ、お願ひします」

「こちらこそ。じゃあ、中に入つて話を聞こつか
泉里は客用のスリッパを置き、部屋へ案内した。

部屋の中は、診療室のような感じではなく、ビジネスホテルのような雰囲気だった。青を基調としている。広さは八畳程度で、シングルベッドが一つと二人掛けのソファーアーが一つ、そして壁側に机と

椅子があつた。

夏目を先にソファーに座らせ、由宇はドアを閉めて向かってくる泉里を田で追つた。

「真弓くん、僕は全部わかつてゐる。君の生い立ち、そして今の状況全てをね。それが僕の力なんだ。超能力の一種だと思つてくれてい

い」
泉里の言葉に、夏目の体は大きく震えた。それを見ながら、泉里は机の前の椅子を引き寄せ、夏目の正面に座つた。由宇も倣つて夏目の隣に座る。

そして、夏目の手を握つた。

「理解は前提要素だ。それがないと始まらない。それからどう進むのか、それが知りたいんだよね？」

「そうですね。この状況の改善が、僕の望みです」

由宇の言葉に、夏目は少し力を取り戻した。知られるのが怖いのではない。それがどう影響しているのかわかるのが怖かつた。自分の知らないところで、何かが動いている。それが自分を壊しているのだと、夏目はわかつてゐた。

泉里は変わらない笑顔で続けた。

「じゃあ、まずは向き合つことから始めようか。君が理解している今までのことを。両親、というのに焦点を当てて」「理解していること、ですか？」

「そう。君は記憶を閉じ込めている部分があるからね。それが今の状態の引き金になっている。だから、それを見つけないと。僕は、君の知らない記憶が見えている」

泉里はにっこりと笑つて言つた。それに対し、夏目は由宇の手を強く握り返した。それは決心の表れだつた。全てを知られても、これ以上悪くはならない。夏目は田を背けていたことから向き合つことを決めた。

その隣で、由宇は泉里の笑顔に引っ掛けかつていた。それに気付いていないのか、泉里はバインダーを夏目に差し出した。

「この紙に、君が覚えている両親から言われた傷付いた言葉を書いていつてもらえるかな。僕と須賀くんは隣の部屋で待ってるから。一人で書いた方が思い出せるからね。ちなみに、この部屋の鏡はマジックミラーで、隣の部屋からは見えているから安心して」「わかりました。じゃあ、由宇あとで」

夏目は自分から手を放し、バインダーを受け取った。あっさりと放れた手に、由宇は安心した。一人にしてはいけない気がしていたが、治療は始まっている。夏目はそれを受け入れているのだから、由宇はそれに従うだけだった。

泉里に案内され、隣の部屋に入った。

「ここは患者の親族が診察状況を見るための部屋だよ」

5・泉里の能力

泉里はパイプ椅子を引き寄せ、ガラスの前に置いた。夏田のいる部屋では鏡だつたが、今いる部屋ではガラスになつてゐる。確かに、患者にとつては隣にいるという安心感が、親族にとつては観察できるという利点があつた。

泉里は椅子に座らずガラスの前に立つてゐたので、由宇も隣に並んで立つた。

「何か聞きたいことがある?」

「本当の名前を教えてくれないんですね」

泉里は一瞬由宇の方へ視線を向けたが、すぐに夏田へと戻した。患者である夏田から由宇は離せない。それでも一瞬逸れたということは動搖したということだった。

由宇は夏田を見たままで続けた。

「十夜さんは本当の名前ですよね。本当の名前を言わないのは、俱楽部の方針ですか?」

「どちらも正解だよ。… そうだね、君は患者じゃないから、教えてもいいかもね。敬語を止めたら、だけど」

泉里は降参するように言つた。口元には苦笑が浮かんでいる。由宇も似た表情になり、いつも夏田たちと話す口調に戻した。

「そんなことでいいのなら」

「僕は泉里。泉に里が付くんだよ。本名を言わるのは、治療方法が関係するからなんだ。患者と深く関われない」

「泉里は辛くないの?」

どこかで聞いた台詞だつた。泉里は思わず由宇を凝視した。由宇はしつかりと泉里を見ていた。

「違うな… 辛くないはずはないよね。その力で、人を嫌いになつたりしない? 嫌にならない?」

泉里はすぐに返せなかつた。開いた口から声は発せられず、その

まま閉じられ笑みを作った。その無言は肯定の意味だと、由宇にはわかる。

由宇は、苦しそうに紙に向かう夏田に視線を戻した。

「僕は君に心を覗かれても良いよ。それを君が望むなら。それが前提要素となるのなら」

理解は前提要素。由宇はもう一度夏田に言った台詞を繰り返した。その言葉に籠められた想いを泉里は間違うことなく受け取った。「嫌われることはあるても、嫌いにはならない。なれないんだよ、辛くはあつても」

「…夏目の治療で傷付くのは泉里なんだね。その泉里を救う人はいる?」

「いるよ。そして、君にも救われる」

ニッと笑った泉里は、夏目の待つ部屋へ通じるドアを開けた。ドアの隙間から、夏目の少し光が戻ってきた瞳が迎えた。大丈夫。何が、という答えはなく、由宇は確信した。部屋を出る前と同じ位置に泉里と由宇は座った。

「真弓くん、『真弓』夏田』を覚えてる?」

6・もう一人の真弓夏目

泉里は夏目からバインダーを受け取り、紙を見ながら言った。泉里の『真弓』夏目が夏目を指しているのではない、ということはわかる。しかし、由宇には意味がわからなかつた。それに対し、夏目は驚いたように目を見開いていた。

その反応に満足した泉里は、夏目の答えを待つた。

「…はい。従兄弟です。五年前に亡くなりました」

「うん。彼は僕の親友だよ。そして、今は『悠里夏目』として存在している」

泉里は白衣のポケットから取り出した蛍光ペンで線を引いた。記された箇所は『名前は適当に従兄弟と同じものを付けられた』。由宇は納得した。夏目には同姓同名の従兄弟がいる。そして、五年前に死んだ彼は今存在している。

『悠里夏目』として。名前が違う、同一人物。それは空想のモノだと思っていた現象だった。

泉里の口から、予想外の言葉ばかりが出る。それが由宇と夏目を混乱させるが、夏目にとつては気を紛らわせ、由宇にとつては一人を理解する要素となつていた。

「輪廻転生を信じる？　君の従兄弟である夏目が死んだとき、無くなつたのは肉体だけで、精神は他の肉体に宿つたんだよ。その『代わりの肉体』の精神は、生まれ変わることを望んでね」

「では、何も犠牲にせずに夏目兄さんは生きている、と？」

「うん。君のことも覚えているはずだよ」

にっこりと笑つて泉里が答えると、夏目は隣に座る由宇に抱きついた。由宇は突然のことですぐに反応できなかつたが、夏目の強い抱擁にゆつくりと背中を擦ることで受け止めた。

顔を由宇の肩に埋めるようにして、夏目は聞こえるように言った。

「夏目兄さんだけだつたんです。親類で僕が素直になれたのは。兄

さんが死んだとき、僕は壊れました。今回のようにではなく、内面で。

八方美人のように見える僕が出来たんですね

「真弓くん、それでも由宇を選ぶ？ それとも『悠里夏目』に頼る

？」

泉里は鋭い質問をした。一年前から仲良くなつた由宇を選ぶか、従兄弟を選ぶか。肩に顔を埋めた夏目がビクッと震えたのが感じられた。驚いているのか、怯えているのか。

由宇は何も言わなかつた。選ぶのは夏目だ。泉里は一人の様子に気を張りながら、夏目の書いた紙に目を通して何かを書き込んでいた。

「僕は由宇を選びます。それしかないです」

「素直になれる従兄弟ではなく？」

「『親のような存在』の由宇です。仲良くなつたのは最近ですが、そんなことは関係ないんです」

表情はわからなかつたが、夏目の声は強かつた。その夏目の決意に、泉里は紙から視線を由宇へと移した。

由宇と泉里の視線が交わる。

「それで、いいのかな」

「夏目が僕を選ぶのなら。親の位置で見守るよ。まあ、この位置は慣れてるしね」

ふつと笑うと、夏目は安心したのか、顔を上げた。思つていたよりも表情は明るかつた。友達ではなく、従兄弟ではなく。実の親ではない理想の親を夏目は由宇に求めていた。

そして、由宇にはその役が出来ると泉里も夏目もわかつていた。

「でも一度、悠里にも会つてあげてね。心配するだろうから」

「はい。悠里夏目さん、ですね」

夏目は普段の夏目に戻つていた。つまりは八方美人のような夏目。本当の夏目を見られる由宇はそう遠くないのかもしれない、と由宇は思つた。決して見ることはできないと思っていた領域。それが、不幸な事故がキッカケだったとはいえ、良い変化に向かいそうだつた。

由宇は、俱楽部に来てから初めて本当の笑顔を見せた。

「なんか、ややこしいよね。夏目が一人つて。ここでは従兄弟を『悠里』、夏目を『真弓』って呼ぼうか」

「そうですね。悠里兄さん…別人みたいです」

「姿は別人だからね。でも、性格は変わっていないから。真弓くんが落ち着いたら、ここで会おうか」

泉里も偽りのない、楽しそうな笑顔を浮かべていた。自覚はしていた。由宇に影響されている自分を。やはり神の予言に間違いはない、と泉里は一人心の中で苦笑した。

そして、夏目に処方を書いた紙を渡した。

「君が忘れていた、今回の引き金はコレだよ」

夏目は指された箇所を見て、目を見開いた。覚えはあるのだろう。由宇も覗き込んで確かめた。黄緑の蛍光ペンで書かれた文字が目にに入る。

『私達の子供は夏目一人で十分よ』

母親の言葉だと推測できる。これは…と由宇は泉里を見た。泉里は何も言わず、頷いただけだった。

この台詞は言う状況によって、意味は変わる。正反対とでもいうべき位置になってしまふ。夏目はそれをどう解釈したのだろうか。どういう状況で言われたのだろうか。泉里は全てを知つて黙つていた。

由宇は、訊くのが自分の役だとわかつていて。

「真弓、これはいつ言われたんだ?」

「お正月に…母方の親戚が集まつたとき」

「そのとき、お母さんの表情は?」

「苦笑、していました。親戚の前では、あまり偽つてはいませんでした」

夏目の頬を一筋の涙が過ぎつた。それは止まることなく溢れ出る。か細い嗚咽を漏らしながら、夏目は紙を大事そうに胸の前で握つた。傷付けられてきたことが多いのに、一つの言葉が胸に刺さる。優しい言葉を掛けられた記憶なんてなかつたのに、こんなにも大切な言葉が残つていた。母親の真意なんてわからないけど、受け取る側の解釈は一つしかない。

夏目の思いが涙から痛いほど伝わつていた。泉里は夏目の頭に手を乗せ、そつと撫でた。

「君は優秀であることを望まれていた。そして、理想の子供でなければならなかつた。その結果、お母さんにとっては、十分すぎる子供だつた。二人もいらない、君だけで良かつたんだ。しかし、その

ときの君には『自分一人で懲りた』という『十分』と勘違いしたんだね』

夏田は静かに頷いた。泉里はよしよし、と撫で続けている。夏田の心がわかる泉里だからこそ、誰よりも夏田の近くにいる。由宇はふつと気の抜けた笑みを見せた。やつと、張り詰めていた気が緩められた。それに泉里は気付いた。

「由宇？」

「一つでも信じられるものがあれば、これからも信じられる。愛情を疑わないで済む。それまで、僕がいる」

「そう。僕ができるのはここまでだよ。これからは由宇の役目だ」泉里は白衣のポケットから取り出したハンカチで夏田の涙を拭つた。小さい子供にするようなその仕種は、夏田の涙を止めた。気持ちが落ち着いたのか、夏田は心配するように由宇を見た。

「でも、由宇には諏訪さんや周防くんが……」

「二人が僕を持っているのは恋愛感情だよ。まだ答えが出せてないから友達の位置にいるけど。でも、真弓は家族の位置になつたんだよね？」

友達ではなく、親のような家族の位置を望んだのは夏田だった。由宇は確かめるように言った。それに、夏田は力強く頷く。

泉里はハンカチを夏田に渡し、一度軽く夏田の頭を撫でて立ち上がりつた。

「これで治療は終わりだよ。真弓くんは来たいときに来ていいけど、由宇は月に一度来ること。処方するからね」

泉里は手品のように、右手をパチンと鳴らして夏田と由宇の膝の上に名刺を出現させた。一人が驚いているのを楽しそうに見て、同じ手からもう一枚名刺を出した。

「由宇にはもう言つたけど、僕の本当の名前は泉里。悠里と会つんだから、知られてもかまわないからね」

名刺には『サイコロジー俱楽部 部長兼医師 紗雲泉』とあるが、泉里は敢えて本当の名前を言つた。このとき、神の意思が動いた、

と泉里は実感した。本当の名前を教えるほどの付き合いになる。
泉里は医師の顔ではなく、友達の顔で笑みを浮かべた。

8・そしてシナリオが変わっていく

「どうだつた？『現世の奇跡』は」「好きになりましたよ。正直、あれほどとは思つていませんでした。一番傷付くのは彼なんでしょうね。あなたはどう思いましたか？」

創造の長

泉里がリビングのソファーで寬いでいたところに、背後から十夜の声が掛かつた。それに驚きもせず、泉里はいつものように答えた。十夜は苦笑を滲ませ、テーブルを挟んで泉里の正面に座つた。「綺麗だと思った。さすが奇跡なだけはある。由宇はいつも傷付いているんだ。人の悪意によつて。それなのに、人が好きなんだ。人を嫌いになりたくないから、接触を避ける。ジレンマだな」「でも、惹かれる人もいる。その『綺麗』を素直に受け取れる人はね」

十夜の後ろに、葵は突然現れた。十夜は仕方ない、というように口元を緩めて溜息を吐き、泉里は純粹な笑顔で迎える。

葵は十夜の横に座り、膝の上で手を組んだ。

「僕も逢いたいんだけどね。でも、僕には機会がないんだよ」

寂しそうに笑う葵に、泉里は驚いて体を乗り出した。

神は全てを知る。つまり、その中に自分と由宇が出逢うということナリオはなかつたということになる。それはなんて残酷なんだろう、と思うと同時に、神と奇跡は出逢わない方がいいのかもしれないと思つた。

葵の隣で、十夜は呆れたように息を吐いた。

「君がそれに甘んじるのか？ 我が儘を言えばいいじゃないか」

「私利私欲で動いてもいい、と？ シナリオにないのに？」

葵は自虐的に笑つた。それが許されないとわかっている口調だつた。

神に我が儘はあつてはならない。神はただ、『いるだけ』存在に

すぎない。統制を乱してはいけない。

創造の長は苦笑いを浮かべた。

「『プログラム』を変えておいて、今更だ。君は由宇に逢つてもいい。逢うべきなんだ」

創造の長は神に許しを「えるべく、左手を鳴らした。何を創造したかなんて、言わなくてもわかっていた。神に許しを「えることなんてできない。それでも、同等である創造の長はそれを願つた。それだけが、それだけで、良かった。

泉里は空氣が変わったことに安心し、背凭れに体を預けた。柔らかいソファーに体が沈む。

「十夜、由宇が会いたいそうですよ。お礼が言いたい、と」

「じゃあ、そのときは葵も一緒にだな」

な? と伺うように十夜は葵を見た。葵は由宇が合つた後十夜の左手を見て、また十夜に視線を戻した。

先程までの哀しみを含んだ瞳は無く、葵はやんわりと笑つた。

「そうだね。十夜と一緒になら、それが理由になる。ありがとう」葵の笑顔に、十夜と泉里は顔を見合わせて苦笑した。神が笑つていられるなら、それは自分自身の幸せとなる。神が笑つていらない世界でなんて生きていけない。世界の関係者は神に近いからこそ、神のことが痛いほどよくわかる。一番近い創造の長なら、その痛みはどれほどなのか、泉里には予想がつかなかつた。

ただわかるのは、自分が思つてはいる以上だと「ことだけだつた。「皆、どこかで傷付いているんです。ただ、それに負けない何かを持つてはいるから生きていける。この世界が由宇にとつて優しいものであつて欲しいですね」

「それは僕が叶えるよ。それは僕の望みでもあるから」

葵はしつかりとした声で言つた。泉里は、朝に聞いた『予言』と同じ調子の声に安心した。何が、という理由はなく、絶対的に信じられる。葵の言葉は確実さを含んでいる。それが、改めて実感できた。

泉里の瞼は自然に下りていった。

「おやすみ、泉里。今日はお疲れさま。世界は僕たちだけで回つて
いるわけじゃないことがわかつたね」

泉里の閉じられた両手に右手をかざし、葵は透き通る声で言った。

泉里はその心地良さに、深い眠りへと沈んでいった。

『現世の神』と『現世の奇跡』が出逢ったとき、何が起こるのか
誰にも予想がつかなかつた。何も起こらないのかもしけない。それ
でも、その場にいた三人は確信していた。

現世であるからこそ、出逢いに価値がある。

ハピローグ・創造の~~夢~~現世の奇跡 + (前書き)

創司十夜の視点です。

「ありがとう」

智哉が煎れた玉露を一口飲み、田の前に座る由宇と智哉に微笑を向けた。二人は疑問符を顔に浮かべ、無言で言葉を促した。

「由宇には、葵や関係者を平等に扱ってくれて。智哉には、それを許してくれて。それに対して『ありがとう』」

「前に葵さんにも感謝されました」

由宇が実家に帰っていて、家族が外出中で誰もいない時に葵は現れた。偶然にしては出来すぎた、しかし自然なタイミングで、葵は由宇に感謝を伝えた。

「浮かれてるんだろうな。本当は会つべきではない由宇に会えたか

ら

フツと苦い笑みを口の端に浮かべた。葵と泉里の二人で話していだときの情景が頭を過ぎる。

あのとき、『会つべきじゃない』と言つたのは葵自身で、『会つてもいい』と言つたのは自分だ。そして、泉里は『会えたらしいのに』と言つた。

『現世の奇跡』。由宇のことをそう言つたのは誰だつたか。

「『サイコロジー俱楽部』は『心』の司ですよね。司は何人くらいいるんですか? 夜さんの『創造』は一人ということがあります」

葛餅を皿に分け、智哉はそれの前に置いた。黒蜜、きな粉が小皿に入っている。

興味津々で話を聞くわけでもなく、由宇と智哉は『友達』と会話をしているような姿勢を取つていた。智哉の手作りの菓子が並び、緊張の欠片もない空気が漂う。

泉里たちが『関係性』を望んだ理由がわかつた気がした。

「『同』の規模はそれぞれだ。司は世界中に散らばっているしな。

でも、『長』は一つの国に集まるよくなっている。今回は日本だつたわけで

前世はイタリアだった、と葵は言っていた。長が覚醒したら、司は直感で長の姿と場所がわかる。そして、各国から司が長の元に訪れる。長の覚醒を喜び、近況報告をするために。あるいは、そのまま共に生きるために。そして、長は自分が長であることを再確認する。

この世界を担う一人だと、強く自覚する。

「長が交代することはあるんですか？」

智哉からの質問ばかりだった。由宇は前に葵と話したからかもしれない。それとも、智哉がもてなす側に徹しているだけか。

綺麗な所作で由宇は餅を口に運んだ。由宇が先に食べることで、手をつけるのに遠慮しなくてよくなる。そんな気遣いが心地よかつた。

「ある。滅多にない」とだけ。夏田、悠里夏田が『知識の司の長』になつたのがそれだ

泉里のために。そう言えるほど、イレギュラーな、タイミングの良い交代だった。『世界の異変』の一つだったが、悪い影響だけではなかつた。

今世は、パートナーが見つかった長が何組もいる。
「自分が偉いと驕つたり、責務から逃げたりしない人が選ばれるんですね」

智哉の方に向けていた視線を由宇に移した。相変わらず鋭いところを突いてくる。

長になるための資格はないが、選ばれたら断ることはできない。
「言い得て妙だな。確かにそれが基準になるかもしれない。長に拒否権はないからな。驕らない、逃げないは基本だ」

「その条件を満たす人って少ないですね。僕は無理ですか」
否定の言葉が出そうになつたが、呑み込んだ。関係者の間で由宇が『現世の奇跡』と呼ばれていることは秘密だつた。絶対的公平を

持つ由宇。長に選ばれてもおかしくない素質を備えていた。

しかし、智哉を選んだから、普通の人間だと言えるのかも知れない。

「『司』は一般的には超能力者と認識されることがある。それも条件になるな。司は案外近くにいるかもしだれなってことだ」

「夏目くんの従兄が司の長でしたね」

智哉がため息を吐いたのに対し、由宇は苦笑して玄米茶に口を付けた。

夏目がかかつた医者も心の長だった。その前に俺に会つて、俺が泉里を紹介したわけだが。

関係者の近くに偶然いた普通の人間たち。関わらずに終わる可能性の方が高いのに、由宇たちは深く関わった。それは『世界の異変』と呼ばれる『プログラムの影響』かもしだれ。現世だけしか関われない人間と交友を深めるなんて。来世に引きずるに決まっている。それでも、切り捨てるこことなんてできない。

「君たちなら、来世でも出逢えるかもな」

冗談ではなく望みを込めた咳きに、智哉と由宇はふわりと笑った。悪くない。この世界を護るのも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8932c/>

運命という名の奇跡

2010年10月8日15時54分発行